

【研究ノート】

心理支援職の職業的アイデンティティ形成に関する探索的検討 — 言語的表現の構造的特徴を通して —

佐藤 安子¹⁾・新澤 伸子²⁾・吉岡 由美³⁾・佐藤 淳一⁴⁾

要旨

本研究は、心理支援職の語りにおいて、臨床経験の段階に応じてどのような語彙が用いられるかに焦点を当てた探索的検討である。対象とした語りは、「志望動機」「オリエンテーション」「アイデンティティ」「戸惑い」の四領域であり、語彙の使用傾向および抽象度分布の分析から、職業的アイデンティティ形成過程の構造的特徴を検討した。

その結果、初任者では直接的体験や感情に基づく語彙が中心となり、自己の認知化と制度的適応が並行して進行する段階が示された。中堅では判断的語彙が広範に分布し、他者との関係を通じて経験を再構成しつつ、葛藤を抱えながら自己理解を深める様相がみられた。ベテランでは抽象度の高低を統合した語彙使用が特徴的であり、過去の経験を理論的枠組みで再解釈し、環境や関係性の変化を協和させながらアイデンティティを維持していた。

戸惑いの語りは、初任者では自己体験の認知化、中堅では対象との関わりや葛藤、ベテランでは場や相手との関係性および判断に現れ、いずれの段階においても言語化と共有が対処の契機となっていた。以上より、心理支援職の職業的アイデンティティ形成は、「自己→対象→関係性・判断」へと関心の焦点を移行させながら再編成される非線形的・螺旋的過程として捉えられ、語彙構造の分析はそのモデル化に向けた基盤的視点を提供することが示唆された。

キーワード：職業的アイデンティティ形成、語彙構造、心理支援職、戸惑いの経験、非線形的・螺旋的過程

目次：

- I 問題の所在
 - 1. 心理支援職における職業的アイデンティティ研究の位置づけ
 - 2. 語り研究の蓄積と本研究の問題意識
 - 3. 探索的研究としての位置づけ
- II 目的
- III 方法
 - 1. 調査方法
 - 2. 調査対象者
 - 3. 調査期間
 - 4. 調査手順
- IV 結果
 - 1. 分析データの作成
 - 2. テキストマイニングの手順と方法
 - 3. 分析の視点
 - 4. 各質問への語りから得られた語彙の構造
- VI 考察
- VII 引用文献

1) 武庫川女子大学非常勤講師（総合教育研究所共同研究員） 2) 武庫川女子大学心理・社会福祉学部心理学科・教授（総合教育研究所研究員） 3) 同学部学科・准教授（総合教育研究所研究員） 4) 同学部学科・教授（総合教育研究所研究員）

I 問題の所在

1. 心理支援職における職業的アイデンティティ研究の位置づけ

心理支援職の職業的アイデンティティは、これまで主として発達心理学的視点に基づき検討されてきた。Erikson, E.H. (1959) は、アイデンティティを青年期の中心的発達課題として位置づけ、とりわけ職業選択が自己同一性の形成に重要な役割を果たすことを指摘した。これを受けて Marcia, J.E. (1965) は、アイデンティティ形成を「危機 (crisis)」と「関与 (commitment)」の二次元から捉えるアイデンティティ・ステータス理論を提示し、職業領域を含む複数の生活領域におけるアイデンティティ形成過程の検討を可能にした。その後、これらの理論的枠組みは青年期に限定されるものではなく、成人期のキャリア形成研究へと拡張されてきた。すなわち、職業的アイデンティティは一度確立される静的な属性ではなく、職業経験や役割変化に応じて再構成され続けるプロセスとして理解されるようになってきている。専門職研究においては、知識や技能の獲得のみならず、自らをどのような専門職者として理解し意味づけているかという自己理解の枠組みが、キャリア形成の中核的要素として重視されている。心理支援職においても、職域の多様化や多職種連携の進展を背景として、職業的アイデンティティは実践経験との相互作用の中で更新され続けるものと考えられる。前田 (2009) は、専門職の職業的アイデンティティが「社会的承認」「連続性」「独自性」の感覚に支えられることを指摘し、渡辺 (2024) は多様な職域経験を通じて心理職のアイデンティティが発達的に形成されることを示している。また、近藤 (2021) は臨床心理士を対象とした調査から、経験年数の増加に伴い専門性の捉え方が深化・拡張する傾向を報告しており、職業的アイデンティティが経験とともに再編成される可能性を示唆する。

以上を踏まえると、Marcia, J.E. (1965) のアイデンティティ・ステータス理論における危機（探索）および関与（コミットメント）は、心理支援職がキャリア形成の中で経験する葛藤や役割への意味づけを理解するための理論的枠組みとして位置づけることができる。

2. 語り研究の蓄積と本研究の問題意識

心理支援職の職業的アイデンティティ形成の重要性はこれまで指摘されてきたものの、経験年数や職域の違いによって、それがどのような枠組みで理解・表現されているのかについては、必ずしも十分に明らかにされていない。既存研究の多くは、青年期や養成段階における職業選択や専門性認識に焦点を当てた研究 (e.g., Marcia 理論を援用した発達の研究) や、少数事例の語りを精緻に分析するナラティブ研究を通じて、キャリア形成過程を描写するものであった。語りに基づく研究は、専門職者が自身の経験をどのように意味づけ、語りとして構成しているかを精緻に描き出す点に強みをもつ。とくに個別事例の語りに即して検討することで、経験の主観的意味や文脈依存的な理解を深めることが可能である。一方で、こうした研究は、経験段階間の差異や語り共通して見られる構造的特徴を探索的に可視化することを目的とするものではない。そこで本研究では、語りの意味内容そのものを解釈する立場とは異なり、語りの中で用いられる語彙の使用傾向や関係性に着目するという視点を採用する。

本稿でいう「語彙構造」とは、心理支援職の語りにおいて使用される語彙の種類、抽象度、および語同士の関係性のパターンを指す。語彙構造は、個々の語り内容を直接解釈するものではないが、経験や役割をどの水準で捉え、どのような枠組みで自己理解を構成しているかを間接的に反映すると考えられる。この意味で、語彙構造は、職業的アイデンティティ形成そのものを示すものではないが、形成に関わる認知的・言語的側面を探索的に捉えるための一指標として位置づけることができる。

3. 探索的研究としての位置づけ

本研究は、経験年数の異なる心理支援職3名の語りを対象とした探索的研究であり、得られた知見を一般化することを目的とするものではない。限られた対象者数を前提とするため、個々の語り内容を精緻に解釈する事例研究的アプローチではなく、経験段階の違いに伴って、どのような語彙が用いられ、それらがどのような構造をもって配置されているのかに分析の焦点を置いた。語の頻度や共起といった指標は傾向を示すものであり、心理的意味づけそのものを直接示すものではない。本稿では、これらの語彙的特徴を、職業的アイデンティティ形成過程を推論的に検討するための基盤的情報として位置づける。すなわち、本研究は、心理支援職の職業的アイデンティティ形成を語彙構造という観点から探索的に可視化し、今後の質的研究や理論モデル構築に向けた方法論的可能性を提示するものである。

II 目的

そこで本研究は経験年数の異なる心理支援職3名の語りをテキストマイニングの手法で分析し、その語彙的構造から心理支援職の職業的アイデンティティ形成過程を探索的にモデル化することを目的とする。なお、本稿は探索的研究として、得られた結果を一般化することよりも、語彙構造から職業的アイデンティティ形成を読み解く可能性を理論的に検討することを主眼とする。本研究は武庫川女子大学心理・社会福祉学部心理学科の倫理審査を受けて承認された（承認番号：2024101）。

III 方法

1. 調査方法：半構造化面接によるインタビュー調査により実施した。

2. 調査対象者：武庫川女子大学文学部臨床心理学専攻修士の中から、共同研究者がインタビュアー・インタビュイー各1名を選び、後述する方法でペアリングした。インタビュアー・インタビュイーとも全員女性であった。インタビュイーは職務経験年数が「初任者」「中堅」「ベテラン」¹に該当する各1名の合計3名であった。

3. 調査期間：2025年2月中旬から3月上旬

4. 調査手順：

(1) インタビュアーとインタビュイーのペアは下記の点を考慮して作った。

1) 公平性と自主性を確保するために、以下の措置を講じた。「師弟関係という関係性による影響を排除するための措置」と「透明性を確保するための追加措置」という2点の対応をした。

2) 師弟関係という関係性による影響を排除するための措置は、以下の2点であった。第1にインタビュアーとインタビュイーのリクルート方法である。教員である著者らはインタビュアーにはならないために、第2・第3・第4著者が、インタビュアーとインタビュイーを第1著者に紹介し、第1著者が「あなた方をインタビュアーとインタビュイーとして第三者の先生に紹介されました」とイン

¹経験年数の区分は佐藤安子他（2024）で定義した臨床経験5年未満を「初任者」、5年以上10年未満を「中堅前期」、10年以上15年未満を「中堅後期」、15年以上20年未満を「ベテラン前期」、20年以上30年未満を「ベテラン後期」に準拠した。本稿における「中堅」は「中堅後期」、「ベテラン」は「ベテラン後期」に該当する職務経験年数であった。

タビュアーとインタビュイーに説明し、研究参加の内諾を得た。第2にインタビュアーとインタビュイーの組み合わせは、「①友人関係などの個人的関係がない」「②仕事上の関係がない」ことを条件に決定し、インタビュイーとインタビュアーに内諾を得た。

3) 透明性を確保するための追加措置

上記のリクルート方法とインタビュイーとインタビュアーの組み合わせ方法でインタビューを設計したことに加えて、師弟関係による影響を排除するための対策を講じたこと、研究実施者と関係のない第三者がインタビューを行うこと、インタビュアーとインタビュイーの組み合わせ方法の透明性が担保されていること、以上のことを説明文書に明記し、インフォームド・コンセントを取得した。

(2) インタビュー内容

研究の目的と趣旨を説明の上、① 心理職を志したきっかけ、② 心理職のオリエンテーション（ここでは心理職としての考え方や価値観）、③ 心理職としてのアイデンティティ、④ 心理職として仕事を上で戸惑ったこと、⑤ ワークライフバランスの課題と工夫、⑥ ジェンダーバイアスの影響、⑦⑧ 役立っている大学院での学び、について半構造化面接を行った。所要時間は1組60分を目安とした。本稿では職業的アイデンティティに焦点を当てるため、①～④までの語りを分析対象とした。

IV 結果

1. 分析データの作成

インタビューの音声データはNVivo Transcriptionを用いて文字起こしを行った。得られた文字データは意味のまとまりのある文章に分割した。外部変数として「初任者」「中堅」「ベテラン」を文字変数として用いた。

2. テキストマイニングの手順と方法

テキストマイニングは「語りのデータを定量化し、構造的に解釈するための基盤技術」といえる。本稿ではKHコーダーを用いて語を抽出し、後述するように「語の抽象度」を分析視点に加えることで、頻度分析を超えて、心理支援職の職業的アイデンティティ形成を理論的にモデル化することを目指した。

まず、コンコーダンス (KWIC) を使用して、文単位での分析が出来るようデータクリーニングを行った。記述されたデータは、誤字脱字を訂正した後、形態素分析 (文章を意味をもつ最小単位である「形態素」に分割し、品詞情報を付与する分析手法) を行い、記述された単語を品詞ごとに分類した。臨床経験年数ごとの特徴を探る上で、それぞれの共通因子が何かを明らかにする必要があるため、質問項目ごとに形態素分析を行った。

抽出語の分析結果において、本来の語の使い方とは異なる語として形態素分析が行われた語は「強制抽出する語」に設定した。強制抽出は、コンコーダンス (KWIC) を使用し、文単位での分析が出来るよう元の正しい語を確認してから行った。

本研究は探索的分析として、抽出語の抽象度に着目することで語りの構造を俯瞰的に捉えることを目的としたため、コンコーダンスによる文脈確認が十分とは言えない。そのため語の意味解釈には一定の制約がある。抽出された「語」と「語彙」は次のように定義して分析した。

3. 分析の視点

本研究では、「語」を意味をもつ最小の言語単位として扱い、「語彙」を各語りにおいて使用された語の集合として定義する。語彙の分布や構成は、語り手の経験や認知、感情、および制度的枠組みとの関係を反映する指標として位置づけた。

加えて分析視点として「語の抽象度」を導入した。本研究における語の抽象度とは、語の言語学的分類そのものを目的とするものではなく、語り手が経験をどの程度一般化・概念化して捉えているかを間接的に示す指標として位置づけている。

抽象度は、語が指し示す意味の一般性・具体性に基づき、高抽象度（心理的状态や評価）、中抽象度（制度・活動・過程）、低抽象度（具体的な職業・制度・行為）の3水準に分類した。

抽象度の算出には Paivio, A. et al. (1968) の Concreteness Ratings を用い、評定値（1～7）を線形変換して0～1の尺度に正規化した。

4. 各質問への語りから得られた語彙の構造

(1) 「心理職を志したきっかけ」についての語彙の構造

分析に使用した総抽出語 439 語、総異なり語数 216 語であった。なお、「総異なり語」とは、分析対象となったテキスト全体において重複を除いた語の種類数を指し、語彙の多様性を把握するための基礎的指標である。

Table1 「心理職を志したきっかけ」への語りから得られた抽出語の抽象度と語り手別生起頻度

抽象度	高						中			低					
抽出語	感じ	気持ち	好き	思う	難しい	分野	臨床	就職	受ける	カウンセラー	授業	聞く	入る	大学院	
抽象度	0.83	0.83	0.83	0.83	0.83	0.67	0.67	0.50	0.50	0.33	0.33	0.33	0.33	0.17	合計
初任者	2	0	0	7	1	4	0	0	0	0	1	0	0	0	15
中堅	7	3	0	5	3	1	4	2	3	0	0	1	0	0	29
ベテラン	4	4	3	11	0	1	2	2	2	7	2	5	5	4	52

高抽象度 (0.67～1.0): 心理的状态や評価語 (例: 感じ、気持ち、好き、思う、難しい)

中抽象度 (0.34～0.66): 制度・活動・過程を表す語 (例: 分野、臨床、就職、受ける)

低抽象度 (0～0.33): 具体的な職業・制度・行為 (例: カウンセラー、大学院、授業、聞く、入る)

1) 得られた語りと抽出語の抽象度

抽出語の抽象度を検討するため、3語以上出現し、「心理職を志したきっかけ」に特徴的と判断される語を経験年数別に分類した (Table 1)。その結果、経験年数が長い語り手ほど、頻出語に含まれる語彙数が多い傾向が示された。

語の抽象度分布からは、「心理職を志したきっかけ」の語りにおいて、内的経験を示す高抽象度語と、制度的・社会的条件を示す低抽象度語が併存していることが確認された。特にベテランでは、両者の相互作用を想起しながら語られている可能性が示唆される。

2) 語の抽象度と対応分析図から得られる知見

対応分析 (correspondence analysis) は、カテゴリデータ間の関連性を視覚的に把握するために用いられる多変量解析手法であり、本研究では語と経験段階との関係性を探索的に捉えるために使用した。本研究で用いた対応分析図は、語と経験段階 (初任者・中堅・ベテラン) との関係性を二次元空間上に配置したものである。図中において、互いに近接して配置された語やカテゴリーほど、使用傾向が類似していることを示す。また、原点から離れて位置する語ほど、全体の語彙使用傾向の中で相対的に特徴的な語であることを意味する。したがって、本図は個々の語の意味内容を直接示すもので

一方、ベテランの語った語は第3象限に集中し、抽象度の高低にかかわらず限られた領域に収束していた。これは、高いメタ認知力のもとで過去の経験が理論的枠組みや社会的文脈と統合され、志望動機が「現在の視点からの再解釈」として安定的に語られている段階であることを示唆する。

以上より、「心理職を志したきっかけ」の語りは、初任者では直接的経験に基づく感情的語りとして、中堅では経験の再構成を伴う探索的語りとして、そしてベテランでは理論的・統合的再解釈として語られるという発達の差異を示すことが示唆される。

(2) 「心理職のオリエンテーション」についての語彙の構造

分析に使用した総抽出語 302 語、総異なり語数 162 語であった。

1) 抽出語とその抽象度：

Table2 「心理職のオリエンテーション」への語りから得られた抽出語の抽象度と語り手別生起頻度

抽象度	高									中				低			合計	
	感じ	影響	思う	思える	多い	良い	臨床	変わる	緩い	セラピー	カウンセリング	オリエンテーション	研修	受ける	先輩	検査		テンプレート
抽出語	0.83	0.83	0.83	0.83	0.83	0.83	0.67	0.67	0.67	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.33	0.33	0.17	
初任者	6	3	6	14	3	1	0	5	2	4	0	0	0	4	2	0	2	52
中堅	8	0	2	3	2	0	3	0	0	0	2	1	0	1	2	2	0	26
ベテラン	2	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	9

高抽象度 (0.67 ~ 1.0)：心理的状态や評価語 (感じ、影響、思う、思える、多い、良い)

中抽象度 (0.34 ~ 0.66)：制度・活動・過程を表す語 (セラピー、臨床、カウンセリング、オリエンテーション、研修、受ける、変わる、緩い)

低抽象度 (0 ~ 0.33)：(具体的な役割や物理的对象先輩、テンプレート、検査)

さらに語彙の抽象度を検討するために、上記(3)と同様の基準で抽出し経験年数ごとに分類した。

抽出語の抽象度については、(3)と同様の基準に基づき、経験年数ごとに分類した。ただし、「テンプレート」は出現回数が2であったものの、特徴的であると判断し分析に含めた (Table 2)。

抽象度の異なる語群は、心理支援職のオリエンテーションを、「自己志向 (内的経験)」「他者志向 (人間関係)」「制度志向 (専門的枠組み)」の3つの水準から構成されるものとして整理できる。高抽象度語は内的経験や評価に関わる側面を、中抽象度語は制度や活動過程を、低抽象度語は具体的な職業的行為や制度をそれぞれ反映すると考えられる。

語の生起頻度を見ると、初任者では高抽象度語と低抽象度語が同時に用いられており、職業的志向と制度的枠組みへの適応が並行して進行している段階にあることが示唆される。中堅では中抽象度語の使用が相対的に多く、他者との関係性の中で経験を再構成している過程にあると解釈できる。一方、ベテランでは高抽象度語と中抽象度語が併存するものの、語彙全体に占める比重は低く、心理職としての定位や他者との関係づけが既に安定していることから、オリエンテーションが語りの中心的テーマとはなっていない可能性が示唆される。

2) 語の抽象度と対応分析図から得られる知見

対応分析図 (Figure 2) において、成分1は心理支援職の実践経験を抽象化・理論化する程度を示すメタ認知力、成分2は語彙の拡散度を表す指標として解釈される。ここでいう成分1のメタ認知力とは、心理支援職が自身の実践や経験をどの程度抽象化・理論化して捉えているかを表す指標である。

対応分析図内の、Frequencyを示す円のサイズは各図内での語の出現頻度に基づく相対的なものであり、図間で頻度の絶対値を比較することは想定していない。そのため、Figure 1とFigure 2では分析対象となる語の頻度分布が異なり、結果として円のサイズ感が異なっている。

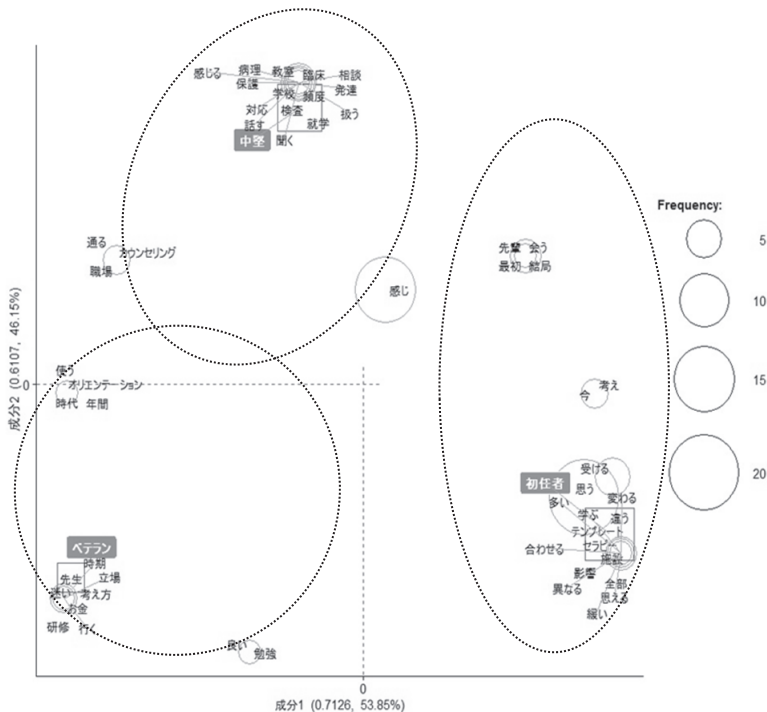


Figure2 「心理職のオリエンテーション」への語りの対応分析図

初任者の語彙は、高抽象度語と低抽象度語が併存して分布しており、内的経験の意味づけと具体的体験への依拠が同時に生じている段階にあることが示唆される。中堅では、語彙の範囲が拡大し、抽象度の高い語彙が多く用いられており、自身の実践や判断を対象化して振り返るメタ認知的視点が形成されつつあると解釈できる。さらに、他者との関係性や相互作用に関わる語彙が多く用いられている点から、自己と他者との関係そのものを調整対象として捉えている可能性が示唆される。

一方、ベテランでは語彙の抽象度の拡散は比較的lowく、メタ認知力の高い位置に分布している。これは、自己の枠組みを相対化しつつ、内省と再構築を行う自己志向的メタ認知が安定して機能している段階にあることを示唆している。

(3) 「心理職のアイデンティティ」についての語彙の構造

分析に使用した総抽出語 463 語、総異なり語数 219 語であった。

1) 抽出語とその抽象度：

語彙の抽象度を検討するため、上記(3)と同様の基準で抽出語を経験年数ごとに分類した (Table 3)。その結果、「職業的アイデンティティ」に関する語彙では、初任者およびベテランにおいて特徴的語彙が多く抽出される傾向が認められた。

高抽象度語は、「自分」「思う」「考える」「感じる」など、自己の経験や価値観を振り返る語が中心であり、職業的アイデンティティの形成過程における内省およびメタ認知的プロセスを反映するものと考えられる。また、「謙虚」「無理」「難しい」といった評価語は、自己と職業との距離感や葛藤を表す語として位置づけられる。また中抽象度語は、「先輩」「学生」「職場」「卒業」など、社会的役割や発達段階を示す語が多く、アイデンティティ形成が他者との関係性や職場・職域といった制度的移行の影響を受けることを示唆している。一方、低抽象度語は、「セラピー」「施設」「踏み台」など、具体的な実践場面や技法を指す語であり、職業的アイデンティティが制度的・環境的条件に依存する側面をもつことを示している。

以上より、高抽象度語は内省・メタ認知に関わる語、中抽象度語は社会的経験や役割移行に関わる語、低抽象度語は制度的・技法的枠組みに関わる語として整理できる。

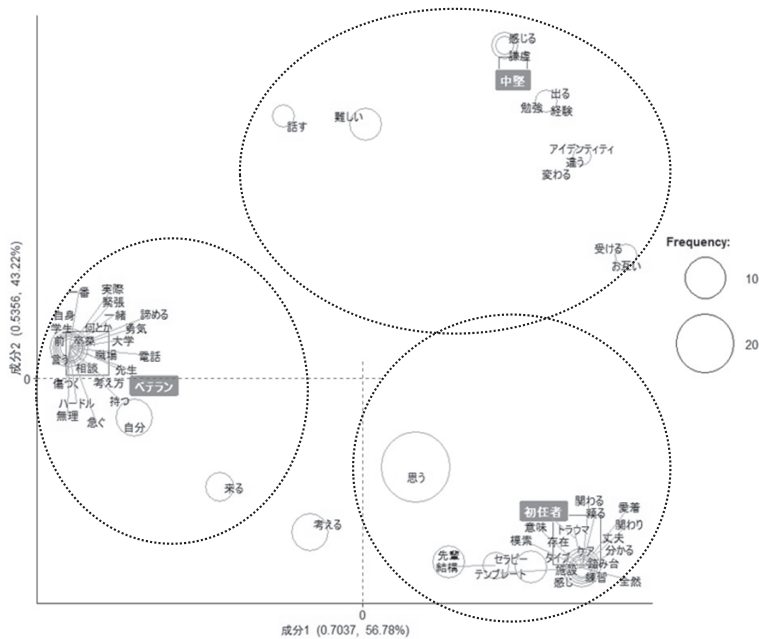


Figure3「心理職のアイデンティティ」への語りの対応分析図

次に、経験年数別に語彙の様相を検討する。初任者では、高抽象度語と低抽象度語が同時に出現しており、個々の臨床経験を積み重ねながら、それらを逐次モニタリングしている段階にあると考えられる。また中堅では、頻出語が限定的であり、特定の語に収束しない個別性の高い語りが特徴的であった。これは、職業的アイデンティティが固定化される過程にあるというよりも、多様な経験を通じて再編成されつつある段階にある可能性を示唆している。一方、ベテランで

は、高抽象度語と中抽象度語が比較的高頻度で用いられており、人的・制度的環境の変化を受けながらも、心理支援職としてのアイデンティティが再解釈されつつ維持されている段階にあると考えられる。

2) 語の抽象度と対応分析図から得られる知見

対応分析図 (Figure 3) において、成分1はメタ認知力の発達度、成分2は語彙の拡散度を示すと解釈される。成分1のメタ認知力とは、心理支援職が体験した人間関係や共感的態度を、どの程度抽象化・理論化して捉えているかを示す指標である。

初任者の語彙は、個人的な職業体験や感情に基づく低抽象度語が中心であり、アイデンティティが「感情への対処」と「制度的・構造的枠組みへの適応」を通じて形成されている段階にあると考えられる。これは、臨床経験を積みながら、自己の実践を逐次的に意味づけていく過程に対応するものである。

一方、ベテランの語彙は、メタ認知を示唆する高抽象度語と、他者との関係性や環境要因を示す語が相互に関連づけられており、環境や対人関係の変化を行動的・認知的に統合しながら、職業的アイデンティティを再構成・維持している段階にあると解釈される。

これに対して、中堅の語彙は特定の象限に収束せず分散しており、「オリエンテーション」に関する語りの特徴と併せると、個々の臨床経験を対象化するメタ認知と、他者との関係性を俯瞰するメタ認知とが同時に機能する「二重のメタ認知」の段階にあることが示唆される。このことは、中堅期において心理支援職としてのアイデンティティが一時的に拡散する様相を呈しつつも、その過程自体が発達の移行の一局面である可能性を示している。

(4) 「戸惑ったこと」についての語彙の構造

分析に使用した総抽出語 555 語、総異なり語数 259 語であった。

1) 抽出語とその抽象度:

さらに語彙の抽象度を検討するために、上記(3)と同様の基準で抽出語を経験年数ごとに分類した。抽象度の高い語(「思う」「心理」「困る」「楽」など)は、戸惑いの際に生じる内面的な揺れや判断基準を示す心理的状態・評価語であり、抽象度の中程度の語(「仕事」「相談」「質問」「発表」など)は、制度・活動・過程を表し、戸惑いが生起する背景としての環境との相互作用を反映する語と位置づけられる。抽象度の低い語(「子供」「資料」「学生」「給料」「職場」など)は、具体的な役割や物理的・制度的対象を指す語である。

Table4「戸惑い」への語りから得られた抽出語の抽象度と語り手別生起頻度

抽象度	高											中				低					
抽出語	思う	心理	関係	楽	絶対	困る	多い	相談	質問	今	言う	仕事	出る	発表	働く	職場	給料	子供	資料	学生	
抽象度	0.83	0.83	0.83	0.83	0.83	0.83	0.83	0.67	0.67	0.67	0.67	0.50	0.50	0.50	0.50	0.33	0.33	0.17	0.17	0.17	合計
初任者	10	4	4	1	1	0	2	1	5	0	0	4	2	2	0	0	0	0	4	0	30
中堅	5	4	1	1	0	0	2	1	0	4	0	4	1	0	0	1	0	0	0	0	19
ベテラン	10	0	1	1	3	4	3	4	0	8	8	4	4	0	5	4	4	5	0	4	62

高抽象度 (0.67 ~ 1.0): 心理的状態や評価語 (心理、思う、困る、楽など)

中抽象度 (0.34 ~ 0.66): 制度・活動・過程を表す語 (仕事、相談、質問、発表など)

低抽象度 (0 ~ 0.33): 具体的な役割や物理的対象 (子供、資料、学生、給料、職場)

経験年数別に語彙の様相をみると、初任者では高抽象度語と中抽象度語が同時に多く出現し、さらに低抽象度語「資料」が初任者のみに認められた。これは、初任者が職場・職域での実務経験を逐次モニタリングしながら戸惑いを経験している段階にあることを示唆する。一方、中堅では頻出語の出現頻度が相対的に低く、語彙の個性が高いことから、戸惑いが個々の臨床状況や関係性に依存して語られている可能性が示される。これに対してベテランでは、高抽象度語から低抽象度語まで広範な語彙が出現し、頻出語数も最も多かったことから、戸惑いを引き起こす状況そのものが多様化していると解釈される。とくにベテランでは、高・中・低いずれの抽象度の語も相対的に多く出現しており、

戸惑いが特定の状況に限定されず、内面・関係性・制度環境にまたがって経験されていることが、語彙分布の広がりからも確認された。

以上より、心理支援職における「戸惑い」は、①環境・制度的要因(「職場」「給料」など)、②対象との関わり(「子供」「学生」「相談」など)、③内面的葛藤(「思う」「言う」「絶対」など)の三要因が相互に関与して生起する現象として捉えられる。

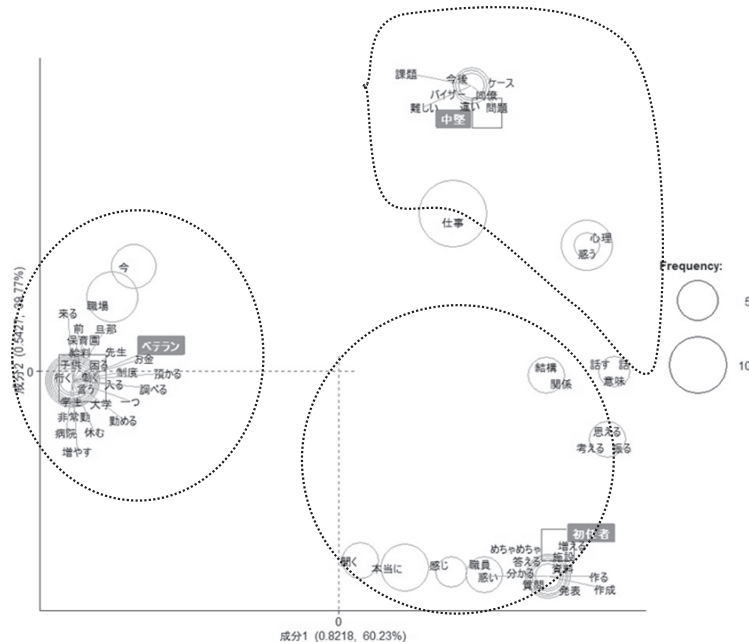


Figure4「心理職の戸惑い」への語りの対応分析図

2) 語の抽象度と対応分析図から得られる知見

対応分析図 (Figure 4) において、成分1は戸惑いが生じる心理支援および生活場面への対処を俯瞰するメタ認知力の発達度を、成分2は語彙の拡散度を示すと考えられる。成分1は最も多くの情報を説明しており、心理援助職が戸惑いにどのような方向性や姿勢で向き合っているかの違いを反映している。初任者の語は第4象限を中心に分布し、個人的な職業体験とその認知に関する語彙が多く認められた。中堅では第1・4象限に分布が広がり、対象との関わりと内面的葛藤を示す語彙が併存していた。一方、ベテランの語は第2・3象限に集中し、戸惑いが生じる「場」や「相手」と内面の判断に関わる語彙が多く含まれていた。

これらの結果から、戸惑いの内容は発達段階によって異なり、初任者では自己体験の認知化、中堅では対象との関わりと自己葛藤、ベテランでは関係性や判断への対応として特徴づけられると考えられる。いずれの段階においても、戸惑いは経験を言語化し意味づけ、共有する過程を通じて対処されており、これは心理職のアイデンティティ形成が自己から対象、さらに関係性・判断へと展開していく過程に対応していることを示唆している。

VI 考察

本研究で示される結果の解釈は、テキストマイニングによって得られた語彙的配置と使用傾向を、発達心理学および職業的アイデンティティ研究の理論枠組みに照らして読み取った一つの理論的解釈にすぎない。

本研究は、「語りそのもの」の解釈ではなく、心理支援職が仕事の語りの中で経験段階に応じてどのような語を用いるかに焦点を当てた探索的研究である。そして、次段階の質的研究や理論モデル構築に向けた基盤づくりとして位置づけられる。まず語りの構造的特徴の視点から心理支援職の職業的アイデンティティ形成過程のモデル化を試みる。

1. 「心理職を志したきっかけ」における語彙構造の特徴

初任者は、直接的な体験や感情に基づく語彙が中心であり、語彙の拡散度は低い。これは、自己の感情や経験をそのまま語る段階にあり、メタ認知が発達途上であることを示す。中堅は、実践的・判断的語彙が広範に分布し、過去の経験を再構成しながら職業的適性や価値観と照合している。自己理解を進める渦中にあり、語彙の拡散度が高い。ベテランは、抽象度の高い語と低い語を狭い領域で集中させ、過去の経験を理論的枠組みで再解釈している。これは、志望動機を「現在の視点からの再解釈」として意味づける成熟した段階を示す。これは、アイデンティティ形成を「心理社会的基準」と捉えた杉村(2008)の知見とも一致する。

2. 「オリエンテーション」における語彙構造の特徴

語彙の抽象度分布から、心理職のオリエンテーションは、自己志向(内的経験)、他者志向(人間関係)、制度志向(専門的枠組み)の3軸で構成されると考えられる。

初任者は高抽象度語と低抽象度語が同時に出現し、「自己のあり方」と「制度的枠組み」が並行して進行している。中堅は中抽象度語が多く、他者との関係性を通じて経験が変容している過程を自己認知している。ベテランは高抽象度語と中抽象度語が同時に出現するが頻度は低く、すでに「心理職としての定位」が定まっているため、語りにおけるオリエンテーションの比重は小さい。以上から、オリエンテーションは初任者では強く意識され、中堅では関係性を通じて変容し、ベテランでは安定

化する。これは Paivio, A. (1971) の二重符号化理論における「言語的符号化」と「イメージ的符号化」の相互作用を職業的発達に応用できる可能性も示唆している。具体的には自らの専門的アイデンティティや支援様式を言語的に説明するだけでなく、イメージ的に捉えることで自己理解が深まること、意図的に「言語」と「イメージ」を組み合わせることで、クライアントに伝わりやすい表現が促進されることが生じうることを示す。その結果、言語で自身を定位することと自己イメージが結びつき、アイデンティティがより強固で支援者の発する言葉との持続性が強まると考えられる。

3. 「アイデンティティ形成」における語彙構造の特徴

初任者は高抽象度語と低抽象度語が同時に出現し、臨床経験をモニタリングしながら感情と構造への適応を進めている。中堅は頻出語が少なく、個別性の高い語りが特徴的である。「謙虚」という語が示すように、自己の立場を他者との関係性の中で再認識している。ベテランは高抽象度語の出現頻度が高く、環境や対人関係の変化を認知的・行動的に協和させながらアイデンティティを維持している。

以上からアイデンティティは「感情と構造への適応（初任者）→個別的な関係性の再認識（中堅）→環境・関係性との協和による維持（ベテラン）」へと展開することが示唆される。この知見は Marcia, J.E. (1965) のアイデンティティ・ステータス理論における「達成」「モラトリアム」などの段階的变化を反映していると考えられる。これは、語りの中の語彙の抽象度・探索性・自己への言及の仕方が、アイデンティティ形成の段階的变化（達成・モラトリアム・早期完了・拡散）を言語的に表すことを示している。

4. 「戸惑いの構造と対処」における語彙構造の特徴

初任者は、心理的状態や制度的活動に関する語彙が多く、職場経験を逐次的にモニタリングしながら適応を試みる段階にあると考えられる。中堅では頻出語が少なく、個別性の高い語りがみられ、臨床経験と他者関係の双方を対象としたメタ認知的処理に注力していることが示唆される。

一方、ベテランでは抽象度の高低にわたる語彙が用いられ、戸惑いの対象が特定の出来事に限定されず、関係性や判断、倫理的葛藤を含む広がりをもつ。「場」や「相手」といった関係性に関する語彙の多さは、状況全体を俯瞰しながら判断を行う実践の特徴を反映していると考えられる。

以上より、戸惑いの内容や語彙構造は経験段階によって異なるものの、いずれの段階においても、経験を言語化し、意味づけ、他者と共有する過程が戸惑いへの対処の重要な契機となっていることが示唆される。心理支援職の職業的アイデンティティ形成は、経験段階ごとに焦点や語彙の抽象度を変化させながら、再編成を繰り返す非線形的過程として捉えられる。

5. 語彙構造の探索的結果から得られる理論的示唆

なお、以下に示す枠組みは、本研究の探索的結果を一般化することを目的としたものではなく、語彙構造の差異から示唆された特徴を整理するための仮説的・概念的整理である。本研究のデータから発達過程を直接的に示すことはできないため、ここで示す枠組みは、今後の縦断的研究や質的研究との接続可能性を検討するための一つの視座として位置づけられる。

最後に、本研究で得られた語彙構造の差異を踏まえると、心理支援職の職業的アイデンティティは、経験の蓄積に応じて同一水準を反復するのではなく、意味づけの水準を変えながら再編成されていく可能性が示唆される。本稿では、この過程を理解するための仮説的枠組みとして、螺旋的变化という観点から整理を試みる。

本研究は、職場や職域といった環境からの要請に応答し続ける専門職が、経験を意味づけ直しながら自己理解を更新していく過程を、語りの構造的な特徴から探索的に捉えたものである。

IV章およびVI-4で示した語彙構造の分析結果を総合すると、初任者では自己体験や感情に基づく直接的な認知が中心となり、中堅では対象との関係性や自己葛藤を通じた経験の再構成が進み、ベテランでは関係性と判断を統合しながら過去の経験を理論的枠組みで再解釈する段階へと移行する様相が示唆された。この過程は、「自己→対象→関係性・判断」へと関心の焦点が移り変わりつつ、語りの抽象度が揺らぎながら再編成される点に特徴がある。

本稿では、このような非線形的な変容過程を仮説的に「螺旋的発達」と呼び、心理支援職の職業的アイデンティティ形成を理解するための一つのモデルとして提示した。環境適応と自己覚知を基盤とする専門職一般のキャリア発達を検討する際の視点としても理論的示唆を与える可能性をもつものである。

なお、本研究は経験年数の異なる心理支援職3名の語りを対象とした探索的研究であり、得られた知見を一般化することを目的とするものではない。語りの個別性や対象者の個人的特性を詳細に分析することも可能であったが、本稿では方法論上の選択として、分析の焦点を語彙の使用傾向とその構造に限定した。この点は本研究の限界であると同時に、語彙構造を指標として職業的アイデンティティ形成過程を可視化するという、本研究の独自性を支える前提でもある。

以上より、本研究で示した「螺旋的発達」モデルは、少数事例に基づく予備的提案ではあるものの、今後、対象者数を拡大した質的研究や縦断的研究を通じて、職業的アイデンティティ形成過程の一般性と職種固有性を検討するための理論的基盤となりうると考えられる。

VII 引用文献

- Erikson, E.H., 1959, *Identity and the Life Cycle: Selected Papers*. New York: International Universities Press.
- 近藤 孝司 2021, 「臨床心理士は自身の職業的アイデンティティと専門性をどのように捉えているのか」『上越教育大学研究紀要』40(2), pp537-546.
- 前田 智香子 2009, 「専門家の職業的アイデンティティ形成の研究に必要な視点」『関西大学文学部心理学論集』3, pp.5-14.
- Marcia, J. E., 1965, Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3(5), pp.551-558.
- Paivio, A., Yuille, J. C., & Madigan, S. A., 1968, Concreteness, imagery, and meaningfulness values for 925 nouns. *Journal of Experimental Psychology Monograph Supplement*, 76(1), pp.1-25.
- Paivio, A., 1971, *Imagery and Verbal Processes*. New York: Holt, Rinehart & Winston
- 佐藤 浩一 1999, 「語の抽象度の測定とその応用」『認知科学』6(2), pp.125-138.
- 佐藤 安子・吉岡 由美・佐藤 淳一・谷口 怜美・佐方 哲彦 2024, 「女性心理職のキャリア発達についての一考察—武庫川女子大学大学院修士課程臨床心理学専攻修士生の就労実態調査から—」『武庫川女子大学教育総合研究所 研究レポート』55, pp.1-18.
- 杉村 和美 2008, 「職業的アイデンティティ形成に関する心理社会的基準」『教育心理学研究』56(3), pp.345-356.
- 渡辺 晋吾 2024, 「心理職としてのキャリア形成における事例からの学び」『高齢者のケアと行動科学』29, pp.12-19. https://doi.org/10.24777/jsbse.29.0_12

An Exploratory Study of Professional Identity Formation among Psychological Support Practitioners: A Structural Analysis of Verbal Accounts

SATO Yasuko¹⁾, NIIZAWA Nobuko²⁾, YOSHIOKA Yumi³⁾, SATO Jun-ichi⁴⁾

Abstract :

This exploratory study examines how vocabularies used in narratives of psychological support professionals differ across stages of clinical experience. Focusing on four narrative domains—motivation for entering the profession, orientation experiences, professional identity, and experiences of confusion—the study analyzes patterns of vocabulary use and levels of abstraction to explore structural features of professional identity formation. The findings indicate that novices predominantly use vocabulary grounded in direct experiences and emotional states, reflecting a phase in which self-recognition and institutional adaptation proceed in parallel. Mid-career professionals show a wider distribution of evaluative and judgment-related vocabulary, suggesting the reconstruction of experience through relationships with others while managing internal conflicts. In contrast, veterans integrate vocabularies of both high and low abstraction, reinterpreting past experiences within theoretical frameworks and maintaining professional identity by coordinating changing environments and relationships. Narratives of confusion also varied by experience level: novices focused on cognitive processing of personal experiences, mid-career professionals on interactions and associated conflicts, and veterans on judgments related to situational and relational contexts. Across all stages, verbalization and shared reflection functioned as key means of coping with confusion. Overall, professional identity formation appears to follow a non-linear, spiral-like process in which the focus of self-understanding shifts from self, to others, and to relational contexts and judgment. Vocabulary structure analysis offers a methodological basis for modeling this process.

Key Words : professional identity formation, vocabulary structure, psychological support professionals, experiences of confusion, non-linear developmental process

1) Part-time Lecturer, Mukogawa Women's University (hereinafter referred to as MWU)

2) School of Psychology and Social Welfare (SPSW), MWU, Professor

3) SPSW, MWU, Associate Professor 4) SPSW, MWU, Professor